



東アジア
子ども学
交流プログラム

子ども学研究所

CRN

チャイルド・リサーチ・ネット



目次



東アジア 子ども学 交流プログラム

- 1 ご挨拶
- 4 東アジア子ども学交流プログラムのあゆみ
- 5 講演者プロフィール

- 10 開幕式と第1回 活動報告 東アジア子ども学交流プログラム発足
- 12 第2回 活動報告 子どもの成長・発達と生活環境
- 14 第3回 活動報告 子どもに優しいグランド・デザイン
- 16 第4回 活動報告 言葉の発達と脳科学
- 18 第5回 活動報告 情動の子ども学
- 20 第6回 活動報告 幼小連携
- 22 第7回 活動報告 質のよい幼児教育とは
- 24 第8回 活動報告 遊びと学びの子ども学
- 26 第9回 活動報告 Playful Pedagogy ～遊びと学びの子ども学～

- 28 CRN のあゆみ
- 30 日本グッド・トイ展示会
- 31 発刊物のご紹介

ご挨拶



東アジア
子ども学
交流プログラム

21世紀はアジアの世紀と言われるが、その基盤には、子どもの健やかな体の成長と心の発達が必要不可欠なことは明らかである。したがって、アジアの国々は、子どもの健やかな成長と発達を損なう子ども問題の要因を明らかにし、その対応を考えなければならない。しかし、その要因は多くの場合単一でなく、いくつかの要因がからみ合っているものであるため、単一な学問体系では解決できない。多分野の専門家が一堂に会して、話し合う必要がある。換言すれば、子どもに関係する学際的な新しい科学が求められるのである。それを、「子ども学」「Child Science」と呼ぶ。すなわち、子どもの新しい「人間科学」「Human Science」なのである。

私たちは、2007年の11月以来、この「子ども学」を柱とする、「東アジア子ども学交流プログラム」によって、主として中国の専門家との話し合いを重ねてきた。いままでの活動の実績をみると、単に学際的である以上に、日中の専門家が、それぞれの文化の中で体験している子ども問題を話し合うことそれ自体にも、大きな意義があることが明らかになった。文化の違いによる、子どもたちの育児・保育・教育の在り方を話し合うことは、お互いが「他山の石」として、それぞれの国の在り方を学び、それを深めることになっていると思う。東アジア、特に中国を中心に始めた東アジア子ども学交流プログラムの果たす役割は大きい。

アジアの世紀と言われる21世紀を、我々はどのように捉えるべきであろうか。世界はヨーロッパ中心の時代、それに続く北米中心の時代の20世紀を終えて、アジア中心の21世紀に入ると言えるのではないだろうか。これまでの20世紀の流れから、21世紀は正に「グローバル」な、「全世界的」な時代になることには間違いない。したがって、豊かな21世紀を築く科学・技術の心ばかりでなく、世界の平和も築く優しさの心、家庭や社会の絆を強め、お互いの交流に必要な共感の心、さらには倫理観、道徳観、責任感の心ももち合わせていなければならない。未来を担う子どもたちに必要な育児・保育・教育のよりよい在り方を、それぞれの国の専門家たちが考えなければならない。

21世紀を「子どもの世紀」にするために、「東アジア子ども学交流プログラム」をさらに発展させ、「子どもの世紀」こそ東アジアから始めたい。

小林登

小林 登
Kobayashi Noboru
(CRN名誉所長、東京大学名誉教授)

ご挨拶



榎原洋一

Sakakihara Yoichi

(CRN 所長、お茶の水女子大学大学院教授)

子ども時代の成育環境が、その後の発達や人格形成に大きな影響を与えることは、これまでの膨大な発達科学の研究によって明らかにされている。

未来の地球の住人である子どもたちの成育環境をよりよいものとするのは、現在の世界の意思決定を担う大人たちの責任であることは自明のことである。

しかし、日本を含めた東アジアの国々では、乳幼児期の子どもの成育にかかわる幼児教育や成育環境を改善するために必要な研究や資源への投資が、不十分であることが明らかになっている。

おりしも、多くの課題を抱えている幼児教育が変革のときを迎えていることは、認定こども園、待機児童問題、幼保小連携などからもうかがうことができる。

「子どもは未来である」というスローガンのもとに開設された「チャイルド・リサーチ・ネット」は、小林登先生と朱家雄先生の提案によって、2007 年以來毎年東アジア子ども学交流プログラムを日本と中国のさまざまな都市を舞台として開催してきた。

子どもの成育環境改善のための、グローバルな視点に立ったさまざまな問題提起にとどまらず、歴史や文化に根差した子どもの成育環境のあるべき姿について、日中の研究者や実践家が、熱心に議論を行ってきた。

2013 年から、創始者である小林登先生からチャイルド・リサーチ・ネット所長を引き継いだ私の使命は、このプログラムをさらに発展させ、関係者の中で研究を深めるだけでなく、得られた知見を全世界により広く発信してゆくことであると思う。

国や文化が異なっても、私たちの使命は下記の言葉に集約される。

For the better future of the children in the world.
(世界の子どものよりよい未来のために)

東アジア子ども学交流プログラムの10回の歩みはそれを実現させるための一歩とってよいだろう。

榎原洋一



東アジア子ども学交流プログラムは、株式会社ベネッセコーポレーションのご支援の下、2007年11月12日に中国上海・華東師範大学で開幕式が行われました。以来、順調に発展し続け、いままで日本の東京、中国の北京、上海、長沙、杭州、鄭州、台北等の都市で学術集会を開催し、日本グッド・トイ展示会も併せて行いました。これらすべての活動は、日中を含めて東アジアの国々や地域における人々の友好と交流を通じて、各国における子どもたちの心身ともに健やかな成長と発達に重要な役割を果たしています。

私は東アジア子ども学交流プログラムの中国代表として、日本代表の小林名誉教授および教授をはじめとする日本子ども学会の関係者の皆様、子どもに関する研究者の方々に心より感謝しています。日本から遥々中国の各地に赴き、東アジア子ども学の研究の発展に多大なご尽力をなさってくださいました。とりわけ小林名誉教授には、深く感謝と尊敬の意を表したいと思います。教授は子ども学を提唱され、そして、その普及と国際化を促進するために、大いに力を尽くしてこられました。中国を含め、多くの東アジアの国々と地域の子どもたち、及び育児、保育、教育に関わる方々に対し多大な貢献をされました。子ども学交流プログラムを推進することを通じ、何度も小林名誉教授のご指導を頂いてきました。子ども学の先輩として、小林名誉教授の真剣な思い、信念の強さ、優しいお心と謙虚な姿勢、及び各国の研究者たちへの諄々たる御教示の言葉に、極めて深い印象を覚えています。

東アジア子ども学交流プログラムの活動は現在もなお進行中です。小林名誉教授をはじめ、各国の研究者、現場の先生方、子どもに関係する人々の努力のもとで、このプログラムは必ずやますます発展し、より豊かな成果を生み出せるものと信じています。



朱 家雄
Zhu Jiexiong
(華東師範大学名誉教授)

東アジア子ども学交流プログラムのあゆみ

東アジア子ども学交流プログラムは、2007年に発足し、今日までに、中国の長沙、上海、杭州、北京、鄭州、台北、日本の東京などの地で学術会議を行いました。日本・中国を中心に東アジア諸国の研究者、大学の協力のもと、以下のテーマで開催しました。

	開催テーマ	開催場所
第1回 2007/11	開幕式 東アジア子ども学交流プログラム発足	中国 上海 中国 長沙
第2回 2008/4	子どもの成長・発達と生活環境 － 子ども学的アプローチ －	日本 東京
第3回 2008/10	子どもに優しいグランド・デザイン － Child-Caring Design (CCD) を実現するために、 我々大人は何ができるのか －	中国 杭州
第4回 2009/9	言葉の発達と脳科学 － 東アジアでの研究と実践 －	日本 東京
第5回 2009/11	情動の子ども学	中国 上海
第6回 2010/11	幼小連携 － 教育の公平性と質の関係の視点から －	中国 北京
第7回 2012/9	質のよい幼児教育とは － Child-Caring Design (CCD) の視点から －	中国 鄭州
第8回 2013/10	遊びと学びの子ども学	台北
第9回 2014/10	Playful Pedagogy ～遊びと学びの子ども学～ － 第2回 ECEC 研究会 －	日本 東京

東アジア子ども学交流プログラムとは・・・

趣旨： 育児・保育・幼児教育に関係する東アジアの大学、研究者の相互交換講義を支援し、子ども学の普及ならびに国際化を目指す。子どもを取り巻く諸問題の解決や環境改善に役立つ学術活動を推進する。

運営組織： 主催 チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)
協賛 (株) ベネッセコーポレーション、ベネッセ教育総合研究所
後援 中華人民共和国駐日大使館、日本子ども学会、
日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議

事務局： チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)
〒206-8686 東京都多摩市落合 1-34 (株) ベネッセコーポレーション内



講演者プロフィール

この活動にご参加いただいた研究者の皆様です。(肩書は当時のもの)

本プログラム創設者



小林 登 *Kobayashi Noboru*

医学博士。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。1927年東京生まれ。1954年東京大学医学部卒業。国際小児科学会会長、国立小児病院医療センター初代センター長、国立小児病院院長などを歴任。現在は、チャイルド・リサーチ・ネット(CRN) 名誉所長、日本子ども学会名誉理事長などを務める。

日本代表



榊原 洋一 *Sakakihara Yoichi*

医学博士。チャイルド・リサーチ・ネット所長。お茶の水女子大学大学院教授。日本子ども学会副理事長。専門は小児神経学、発達神経学、特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。1951年東京生まれ。1976年東京大学医学部卒業。東京大学小児科講師を経て、現職。

中国代表



朱 家雄 *Zhu Jiaxiong*

華東師範大学名誉教授。中国教育学会常任理事、学術委員、環太平洋地区学前教育研究会(PECERA)中国大陸委員会主席。中国教育部の国家プロジェクトである「学前教育学科養成目標・基準とカリキュラムの研究および実践」、「幼児教育改革実験研究」などを担当する。

講演、シンポジウムにご登壇された先生方 (五十音順)

日本の研究者



秋田 喜代美 *Akita Kiyomi*

教育学博士。東京大学大学院教育学研究科教授。専門は教育心理学、保育学、授業研究。現在、日本保育学会会長、日本読書学会副会長など。主な著作に『読書の発達過程』(風間書房)『読書の発達心理学』(国土社)『子どもをはぐむ授業づくり』(岩波書店)『授業研究と学習過程』(放送大学出版会)『知を育てる保育』『保育の心もち』『保育のおもむき』(いずれもひかりのくに)など、多数。



安梅 勅江 *Anme Tokie*

保健学博士、筑波大学大学院人間総合科学研究科教授。スウェーデン・ヨンショピング大学客員教授。1984年東京大学医学部保健学科卒、1989年東京大学医学系研究科大学院博士課程修了。専門は生涯発達ケア、地域ケア、国際保健福祉マネジメント。国際保健福祉学会理事、日本保健福祉学会理事、ワシントン大学子どもアセスメント・インストラクター。



一見 真理子 *Ichimi Mariko*

国立教育政策研究所〈国際研究・協力部〉総括研究官。大学・大学院では、中国語・比較教育学・教育史を専攻。中国における子育て、子ども観、幼児教育・児童研究に関心をもち、1年半の北京留学。帰国後、国立教育研究所を拠点として日中教育関係史、アジア地域の教育政策と教育改革、アジアにおける子育て支援と早期教育などの調査研究に参加。

講演者プロフィール



一色 伸夫 *Isshiki Nobuo*

甲南女子大学人間科学部総合子ども学科教授。国際子ども学研究センター所長。NHK放送文化研究所客員研究員。NHKでは、NHK特集『赤ちゃん』など、子ども関連番組を数多く担当。現在、甲南女子大学で、“子どもとメディアの良い関係”を構築するための「子どもメディア学」の研究と実践を行なっている。



入江 礼子 *Irie Reiko*

共立女子大学教授。OME P(世界幼児教育・保育機構)日本国内委員会常任理事。専門は幼児教育・保育学。お茶の水女子大学大学院家政学研究科児童学専攻修了(家政学修士)。主要著書:「育児日記からの子ども学」(共著:勁草書房)、「親たちは語る」(共編:ミネルヴァ書房)、「乳児保育」(編著:相川書房)など。



上田 信行 *Ueda Nobuyuki*

同志社女子大学現代社会学部現代こども学科教授、ネオミュージアム館長。同志社大学卒業後、セントラルミシガン大学大学院にて M.A.取得。ハーバード大学教育大学院にて Ed.M., Ed.D.取得。専門は教育工学。著書に『プレイフル・シンキング:仕事を楽しくする思考法』(宣伝会議)、『プレイフル・ラーニング:ワークショップの源流と学びの未来』(共著、三省堂)など。



内田 伸子 *Uchida Nobuko*

学術博士。第20期日本学術会議会員。専門分野は発達心理学・認知心理学。1946年群馬県生まれ。1968年お茶の水女子大学文教育学部卒業、1970年同大学院人文科学研究科修了。1998年同大学院人間文化研究科教授。日本発達心理学会常任理事、日本教育心理学会常任理事。



小泉 英明 *Koizumi Hideaki*

理学博士。株式会社日立製作所役員待遇フェロー、独立行政法人科学技術振興機構社会技術研究開発センター「脳科学と社会」研究開発領域総括。専門は分析科学・応用脳科学・環境科学。1971年東京大学教養学部基礎科学科卒業。日立製作所基礎研究所所長、同研究開発本部技師長を経て、2004年から現職。



首藤 美香子 *Suto Mikako*

人文科学博士。白梅学園大学子ども学部子ども学科准教授。専門は子ども観の社会史・児童文化論・比較幼児教育学。特に、日本の子ども観の転換期の構造を「出産・育児」に関する言説と実践の分析を通じて研究。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻修了。2001～2004年中国社会科学院近代史研究所・客員研究員。



多田 千尋 *Tada Chihiro*

東京おもちゃ美術館館長。芸術教育研究所所長。早稲田大学文化構想学部講師。1961年東京都生まれ。明治大学法学部卒業後、ロシア科学アカデミー就学前教育研究所、国立玩具博物館の研究生として幼児教育・児童文化・おもちゃなどを学ぶ。近年は、子どもの福祉文化論及び世代間交流の実践・研究、高齢者福祉におけるQOLの向上とアクティビティケアの連携を目指す。



谷村 雅子 *Tanimura Masako*

医学博士。国立成育医療センター研究所成育社会医学研究部部長。1972年日本女子大学家政理学科卒業。東京医科歯科大学人類遺伝学教室助手、米国テキサス大学遺伝学センター研究員を経て、1987年より現研究所(旧国立小児病院小児医療研究センター)にて、環境と遺伝の両面から小児の健康・発達を研究。特にメディアの影響、児童虐待、小児がん、遺伝性腫瘍など。日本小児科学会子どもの生活環境改善委員会委員。



山本 登志哉 *Yamamoto Toshiya*

教育学博士。早稲田大学教授。子どもとお金研究会代表。日本質的心理学会理事・編集委員。法と心理学会常任理事・編集委員長。1959年青森県生まれ。呉服屋の丁稚を経て京都大学文学部・同大学院で心理学専攻。奈良女子大学在職時に文部省長期在外研究員として北京師範大学に滞在。



渡辺 富夫 *Watanabe Tomio*

工学博士。岡山県立大学情報工学部情報システム工学科教授、情報工学部部長・研究科長。1983年東京大学大学院工学系研究科産業機械工学専攻博士課程修了、工学博士。山形大学工学部情報工学科助手、同大学専任講師、助教授、1992～1993年米国ブラウン大学客員研究員、1993年岡山県立大学情報工学部情報システム工学科教授を経て、現職。

中国大陸の研究者



戴 淑鳳 *Dai Shufeng*

北京大学第一臨床医学院小児科教授、発達・教育心理学修士。中国優生科学協会、優生優育協会理事、中国未来研究会教育分会主任委員などを務める。北京大学病院が設立した学際的・国際的なネットワークをもつ周産期一新生児専攻のパイオニアとしても知られる。



馮 曉霞 *Feng Xiaoxia*

北京師範大学教授、大学院博士後期課程教授、中国就学前教育研究会理事長、学術誌『就学前教育研究』の編集主幹。これまでに担当した課題は全国教育科学計画「第九回五ヶ年計画」、「第十回五ヶ年計画」の重要課題である「中国幼稚園カリキュラム政策研究」等。



傅 根躍 *Fu Genyue*

浙江師範大学教育学院心理学部教授、発達と教育心理学修士課程指導教官。1996年アメリカ・モンタナ大学、1999年カナダ・クィーンズ大学にて、客員研究員として研究を行い、2002年浙江省の「151」人材に選ばれる。専門分野は、教育と発達心理学・心理測定学。



華 愛華 *Hua Aibua*

華東師範大学就学前教育学部部長、中国就学前教育研究会理事、遊びとおもちゃ専門委員会主任、中国陶行知研究会就学前専門委員会主任。専門分野は就学前基本理論、0～3歳児の早期教育指導、就学前の子どもの遊び。



黄 紹文 *Huang Shaowen*

教育学修士。長沙師範専科学校副教授。長期にわたって教師の教育に携わる。主な著書に『学前教育の生態学的思考』、『中国伝統的な児童遊戯観深析』、『中国学前教育研究百科全書(教育理論編)』など。2005年、第一回中国宋慶齡幼児教育賞を受賞。



姜 勇 *Jiang Yong*

教育学博士。華東師範大学副教授。専門は教師教育、子どもの発達・教育基本理論、比較教育。1973年生まれ、北京師範大学教育学院で博士号取得。中国福利会幼稚園の勤務を経て現職。



劉 郷英 *Liu Xiangying*

福山市立大学教育学部准教授。黒竜江大学大学院日本語修士。1989年来日し、1993年京都大学教育学修士。1998年博士後期課程満期修了。主な研究課題は「多文化環境の幼児の母語の発達と教育方法」、「日中幼児教育比較」、「日中教員養成課程の比較」、「絵本の創作と研究」など。

講演者プロフィール



秦 金亮 *Qin Jinliang*

心理学博士。浙江師範大学杭州幼稚園師範学院院长。中国教師教育学会幼稚園教師委員会理事長。中国心理学会教育心理学専攻委員会委員。浙江省就学前教育学会理事長。近年、子どもの発達研究、認知発達神経科学などの研究に携わる。



沈 月華 *Shen Yuehua*

中国福利会国際和平婦幼保健院主任医師、上海第二医科大学教授。中華周産期学会全国委員、上海周産期学会顧問、上海小児科学会新生児学顧問。専門分野は周産期保健、優生優育指導、乳幼児健康教育。



万 鈞 *Wan Fang*

北京師範大学教授。1960～1978年、天津市儿童医院で主任医師を務める。1978～北京師範大学教育学部にて就学前の衛生学を担当。2006年～北京師範大学珠海分校の国際教育学院の教授として、児童栄養学、就学前衛生学、応用栄養学を担当。



王 練 *Wang Lian*

中華女子学院児童発達と教育学院院長、修士課程指導教師。華西医科大学公共衛生専攻学科卒。現在、中国就学前教育研究会健康専門委員会常任委員、北京市就学前教育学会理事。専門は就学前児童健康と保健、児童栄養、幼児教諭育成。



鄒 平 *Zou Ping*

北京市大地実験幼稚園園長、北京市大地幼児教育センター主任、北京市陳鶴琴教育思想研究会理事、北京市保教協会理事、中学高級教師。26年間幼児教育に従事し、数多くの国家レベル及び市レベルの教育研究課題に参画。



張 明紅 *Zhang Minghong*

華東師範大学副教授。専門は就学前子どもの言語教育、0～3才児の発達と教育、就学前子どもの社会教育など。中国学前教育研究会幼稚園課程及び教学專業委員会委員、国家教育科学「第十回五カ年計画」のテーマである「0～3歳児の早期ケアと発達」専門家メンバー。



張 燕 *Zhang Yan*

北京師範大学教授、修士課程教授。北京師範大学教育学科卒。現在、北京就学前教育研究会常務理事、北京市幼児教師スタジオ、公益団体「四環遊戯グループ」の責任者。専門は就学前教育原理、就学前教育体制と管理、幼児教師専攻発展、居住地域非正規幼児教育と流動児童教育問題。



周 念麗 *Zhou Nianli*

心理学博士。華東師範大学教授。研究領域は児童心理、親子関係、0～3歳児の多元知能の測定と育成方案など。1995年お茶の水女子大学心理学士号、1998年東京大学大学院教育学修士号、2003年華東師範大学心理学博士号取得。現在、華東師範大学就学前教育学部心理研究室主任。



韓国の研究者



李 基淑 *Lee Ki Sook*

教育学博士。梨花女子大学教授、梨花女子大学付属・梨花子ども研究院院長。梨花女子大学幼児教育学科を卒業し、アメリカ George Peabody College For Teachersで修士及び博士学位を取得。韓国幼児教育学会会長、世界幼児教育機構(OMEP) 韓国会長を歴任し、現在環太平洋幼児教育学会(PECERA) 韓国会長を歴任。幼児教育カリキュラムと教育プログラムに関する著書多数。

台湾の研究者



范 丙林 *Fan Binglin*

国立中央大学光電科学研究所博士、国立台北教育大学デジタル科学技術設計学学科教授兼学科主任。これまで多くの研究計画に参加し、実体操作型の楽しい科学教育モデルクラスの開発、体感遊び型のマンマシーンインターフェースの設計研究、卓上遊びとデジタル遊びなどの教育基盤と教育媒体の設計を進めてきた。



郭 煌宗 *Guo Huangzong*

医学博士、小児神経科専門医。中国医薬大学付属医院児童発達行為科主任。中国医薬大学医学院(科)小児科学副教授。これまで中華民国発達遅滞児童早期療育協会初代理事長、台湾小児科医学会児童発達委員会主任医院、台湾小児神経科医学会理事、中国医薬大学付属医院小児神経科主任を務める。主要著作は臨床小児科学の論文の他に、「童心瑠璃」「小さな天使を煩わす」「小さな龍を育てる」等がある。



張 世宗 *Shin-Tsung Chang*

建築学修士、コロンビア大学芸術学修士、教育学博士、国立台北教育大学芸術及び造形設計学部教授。国立台北教育大学芸術及び造形設計学部の学部長、おもちゃとゲームデザイン研究所所長、国立台北師範学院視覚芸術教育センターのセンター長、シンガポール Practice Performing Arts School 海外顧問などを担当していた。主な著作は、「楽育」(Edu-tainment)、「遊芸学」など関係論文の他、「玩・遊・戯」、「台湾伝統児童おもちゃ及び智能開発ゲーム」、「伝統科学技術とアイデア楽育」などのほか、「玩物尚智」教材シリーズなどがある。



翁 麗芳 *Wong Lifang*

教育博士、国立台北教育大学幼児と家庭教育学学科教授。現在国家科学委員会100年度少子化時代の児童教養一対日幼児託養制度とその実際(課題責任者)、国家科学委員会98WFAOB00029少子化時代の児童教養一対日の人口構造の変遷、人材養成と児童教養体系(課題責任者)。主要著書『子育て支援の潮流と課題』(共著)ぎょうせい2008、『世界の幼児教育・保育改革と学力』(共著)明石書店 2008、『アジアの就学前教育』・『多文化に生きる子どもたち』ともに明石書店、2006ほか。



蕭 芳華 *Xiao Fanghua*

台湾亜細亜大学副教授。国立成功大学外国語学部卒業後、アメリカ・カリフォルニア州 Occidental College 教育系芸術修士。国立台北大学公共行政政策学系、法学博士、カナダ UBC 博士研究員。亜細亜大学学習及び生涯発展センター主任、国立暨南国際大学比較教育学系助教授、附属高校校長を兼務。教育部、教育庁のアドバイザーボード。

開幕式と第1回活動報告

東アジア子ども学交流プログラム発足

- ◆2007年11月12日、13日、14日
- ◆華東師範大学<中国・上海>
長沙師範専科学校<中国・長沙>



上海で開幕式

2007年11月12日(月)、華東師範大学にて、本プログラムの開幕式が行われました。華東師範大学学前教育研究所所長の朱家雄氏とCRN所長の小林登の間で、調印式とテープカットが行われ、長期的なプログラムのスタートに向け、お互い協力していくことが約束されました。



長沙で講演&幼児教育展覧会

登壇者 ※名前は登壇順、肩書は当時のもの

小林 登 (CRN 所長、東京大学名誉教授)

多田 千尋 (東京おもちゃ美術館館長)

朱 家雄 (華東師範大学教授)

安梅 勅江 (筑波大学教授)

榊原 洋一 (お茶の水女子大学教授)

開幕式の翌日から2日間、記念すべき第1回の講義が、中国の長沙師範専科学校で行われました。日本から、小林登氏 (CRN 所長・東京大学名誉教授)、多田千尋氏 (おもちゃ美術館館長)、安梅勅江氏 (筑波大学教授)、榊原洋一氏 (お茶の水女子大学教授) の4名の専門家が赴き、白熱した講義を行いました。

講演の様子

子どもの育ちに大切なもの、
「生きる喜びいっぱい」

小林 登

子どもに情動のプログラムを働かせ、「生きる喜び」いっぱいにするためには、育児・保育・教育のいろいろなやり方を、脳科学・心理学・教育学・小児科学・小児生態学など、あらゆる分野から学際的に考えなければならない、それを考えるのが「子ども学」であるというお話がありました。会場からは、文理を融合し学際的に子どもの問題を考えていこうという「子ども学」の理念に賛同するコメントが多く寄せられました。



子どもの「遊び力」が危ない

多田 千尋

日本の子どもは、おもちゃのハイテク化により、友だち同士のコミュニケーションや摩擦が少なくなっている上に、お年寄りとの世代間交流も希薄になったことで、遊びの伝承文化が完全に断ち切れてしまっており、「遊び力」が低下している現状を説明しました。そして、会場の参加者と一体となり、失われた「遊び力」を取り戻すような、おもちゃを使った遊びのデモンストレーションを行いました。

4つの講演すべてにおいて、会場は、中国全土から集まった聴講生で埋め尽くされ、講義後は答えきれない数の質問が寄せられるなど、大盛況のうちに幕を閉じました。

第1回を終え、子どもの問題は、教育制度の違いを超えて各国共通のものが多く、また他国に対する関心が非常に高く、よいものを吸収しようとする姿勢があることが分かりました。これは今後の活動を続けていく上で、大きな励みになりました。

子育て・子育てエンパワメント

安梅 勅江

「エンパワメント」とは、その人のもてる力を最大限に引き出し元気にすることであり、育児の場において、子ども、保護者それぞれが「エンパワメント」される方法を、デモンストレーションを交えながら説明しました。その考えに感銘を受けた会場からは、保育事情の異なる中国で取り入れるにはどうすればよいのか、といった質問が相次いでされました。



子どもの社会性の発達とその障害

榎原 洋一

人間の乳児はきわめて優秀な学習能力をもって心を発達させていくが、それらがうまくいかない場合、すなわち発達障害について詳しい説明がありました。特に幼児教育の現場に携わる参加者からは、普段気がかりに思っている子どものことを相談する場面が目立っていました。



第2回 活動報告

子どもの成長・発達と生活環境

— 子ども学的アプローチ —

◆2008年4月19日、20日

◆お茶の水女子大学<日本・東京>



登壇者 ※名前は登壇順、肩書は当時のもの

朱 家雄 (華東師範大学教授)

秦 金亮 (浙江師範大学杭州幼児師範学院院長)

黄 紹文 (長沙師範専科学校副教授)

内田 伸子 (お茶の水女子大学副学長)

榊原 洋一 (お茶の水女子大学教授)

山本 登志哉 (早稲田大学教授)

首藤 美香子 (お茶の水女子大学研究員)

一見 真理子 (国立教育政策研究所総括研究員)

一色 伸夫 (甲南女子大学教授)

第2回東アジア子ども学交流プログラムは、2008年4月19日、20日の2日間にわたって、チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) とお茶の水女子大学 G-COE による主催、ベネッセ次世代育成研究所による共催のもとで開催されました。テーマは「子どもの成長・発達と生活環境 — 子ども学的アプローチ —」。子ども関連の研究者、お茶の水女子大学の学生、子どもに関心をもつ方々、2日間合わせて200名余りの方々が足を運んでくださいました。

1日目の講演の様子

中国人から見た「小皇帝の涙」

朱 家雄

日本で放映され話題になったNHKスペシャル「小皇帝の涙」を中国人の立場から考察した内容が大変関心を集めました。「一人っ子政策と中国の視点」、「教育学者と心理学者、医学者および行政側からの視点」、「東西文化の違いという視点」、「中国の価値観の根底にあるもの」、「小皇帝の幸せ」という多角的な視点について、朱氏から鋭い分析がありました。

発達認知神経科学と早期教育

秦 金亮

発達認知神経科学研究の進展が幼児教育にもたらす意義や、中国における脳科学研究の現状と幼児教育への応用などについて、紹介がありました。

幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解

黄 紹文

長沙師範専科学校は幼稚園教諭を養成する専門校として、中国の国内では大きな役割を果た





しています。幼稚園の先生は踊りと歌、ピアノという芸術の面で優れていることが中国の特徴ともいえます。黄氏の発表で紹介されたカリキュラムからもそのような教育目標を伺うことができました。

シンポジウム1:

日本から見た「中国の子どもたちのいま」

日中研究者の対話です。小皇帝に勉強させすぎではという声が出る一方、「小皇帝たちが『なぜもっと勉強させるように働きかけをしなかったのだ。そのために自分は社会的地位もなく、貧しい生活をしながらはならない』と将来親たちを非難する可能性もあるという話を聞いてハッとしました」という日本の学者からのコメントがありました。

2日目の講演の様子

日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」

山本 登志哉

山本氏が中国留学中に撮影された中国の幼稚園、小学校の様子を放映しながら、日本の子どもとの比較、背景にある中国文化などの視点から分析がなされました。

日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ

首藤 美香子

日中文化・育児観の比較調査や中国の子ども観の歴史的な流れを踏まえながら、日中子ども交流史にまで及ぶ幅広い研究と興味深い史料が数多く紹介され、研究者の間で大きな反響を呼びました。

幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ

一見 真理子

中国と日本の幼児教育の父と呼ばれる重要な人物が取り上げられました。日本の倉橋惣三氏と中国の陳鶴琴氏です。お二人は同じ時代に生きていらっしやって、同じく西洋の考え方を自国に導入しました。二人の共通点と相違点にも触れられており、会場の関係者に一石を投じました。

シンポジウム2:

日中比較 - 「子ども・発達・文化」

2日間にわたる交流プログラム全体に関して、日中の研究者からさまざまな意見が出されました。どの国についても、歴史や文化背景を無視して教育を語ることはできないので、お互いの違いを知り、理解し、尊重しあい、学びあっていくことが大切です。「子ども学」という視点を共有することで、日中の研究者がさらに交流を深め、好ましい関係をつくり上げていくものと期待したいと思います。



第3回 活動報告

子どもに優しいグランド・デザイン

— Child-Caring Design (CCD) を実現するために、我々大人は何ができるのか —

◆2008年10月31日、11月1日

◆浙江師範大学杭州幼児師範学院<中国・杭州>



登壇者 ※名前は登壇順、肩書は当時のもの

小林 登 (CRN 所長、東京大学名誉教授)

朱 家雄 (華東師範大学教授)

秦 金亮 (浙江師範大学杭州幼児師範学院院長)

内田 伸子 (お茶の水女子大学副学長)

榊原 洋一 (お茶の水女子大学教授)

傅 根躍 (浙江師範大学教育学院教授)

戴 淑鳳 (北京大学第一臨床医学院小児科教授)

第3回東アジア子ども学交流プログラムのテーマは、「子どもに優しいグランド・デザイン— Child-Caring Design (CCD) を実現するために、我々大人は何ができるのか —」。このテーマについて、日中両国から、教育、医学など専門分野の異なる子どもに関係する研究者が集い、学術発表や意見交換を行いました。

会議には、浙江師範大学の学生や浙江地方の幼児教育関係者を中心に、2日間で延べ500人以上が出席しました。

1日目の講演の様子

Child-Caring Design (CCD)

小林 登

子どもに優しいグランド・デザインとしてのチャイルドケアリング・デザイン (Child-Caring Design) の必要性と基本理念について基調講演を行いました。大人中心の社会では常に危機にある子どもたちを救うために、子どもの生活の在り方ばかりでなく、生活の中にある教材、玩具、学校、教育制度、そして都市までを子どもにとってより良くデザインしていく必要性があると説明しました。そして、そのために、子

ども学“Child Science”による知見が重要であり、脳科学を柱にする必要があると述べました。この基本的な主張をもとに、その後2日間にわたる講演、ディスカッションが行われることとなりました。

子どもが見る世界

朱 家雄

子ども中心の発想、子どもの目線に立つときに、我々大人は何をすべきなのか。「科学的でなければいけないこと、子どもの発想でなければいけないこと」が必須条件ですが、我々大人はどこまでできるのかについて、哲学や人類進化などマクロな視点で言及しました。

幼児の好みと幼稚園の環境づくりをめぐる

秦 金亮

幼児の発達に効果的な幼稚園環境を作り出すために必要なことは、幼児の興味や好みを理解し、心の声に耳を傾け、認知の特性を把握することが重要であると述べました。浙江師範大学附属幼稚園における子どもの色彩の好みによる環境・空間・カリキュラムのデザイン実践例の紹介もあり、説得力のある講演でした。





2日目の講演の様子

子どものウソは「嘘」?

内田 伸子

嘘やだましの基底にある認知のメカニズムを考察し、子どもは他人をだますことができるのかについて解説がありました。想起のからくりや会話に潜むウソ出現のからくりを知らず、大人が自分の基準で子どもを見てしまった結果、子どものウソが「嘘」になるのであり、乳幼児期、特に自我が芽生える2歳頃からは、親に認められ、何よりも愛されて育った子どもは、決して嘘をつかず他人をだましたりしないということでした。

発達障害と保育

榊原 洋一

集団保育の場において「気になる子どもたち」を発達障害と呼ばれる精神医学的概念に当てはめて考えられるよう、保育園や幼稚園の保育士、教諭が、発達障害についての深い知識をもつ重要性を訴えました。そして、発達障害の概念と、発達障害をもつ子どもたちへの対応、幼稚園・保育園の環境のあり方、すなわち Child-Caring Design について詳しく説明しました。

幼児の社会的グルーミング

傅 根躍

子どもが4歳から他人に追従的行動を始めることが明らかとなった実験を紹介しました。幼稚園児たちに、幾つかの絵画作品に点数をつけさせた後、作者を登場させ再びその作品に点数をつけさせると、3歳の子どもは終始一貫して最初につけた点数を繰り返すのですが、4歳になると作者を前にした時には点数を高めにつけるという実験結果でした。

子どもの感覚・知覚発達障害と 家庭教育環境のデザイン

戴 淑鳳

子どもの知覚発達のための家庭環境作りの重要性を述べました。家庭教育環境は知覚発達障害の主要な要因となり、子どもの心理行動や落ちこぼれを引き起こす重要な原因となるという説を背景に、妊娠前、胎児期、成長の臨界期（0～3歳）の3段階別に、どのような家庭教育環境が望ましいのかについて具体的な説明がありました。



第4回 活動報告

言葉の発達と脳科学

— 東アジアでの研究と実践 —

◆2009年9月11日

◆お茶の水女子大学<日本・東京>



登壇者 ※名前は登壇順、肩書は当時のもの

小林 登 (CRN 所長、東京大学名誉教授)

小泉 英明 (日立製作所役員待遇フェロー)

朱 家雄 (華東師範大学教授)

姜 勇 (華東師範大学副教授)

張 明紅 (華東師範大学副教授)

内田 伸子 (お茶の水女子大学教授)

李 基淑 (梨花女子大学教授)

周 念麗 (華東師範大学副教授)

榎原 洋一 (お茶の水女子大学教授)

9月11日(金)に、チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)、お茶の水女子大学 G-COE 共催で第4回東アジア子ども学交流プログラムを開催しました。

「言葉の発達と脳科学 — 東アジアでの研究と実践 —」というテーマで、脳科学の最新の研究成果をふまえて、“ことば”というキーワードで日中韓の研究と実践について、三ヶ国の専門家による講演とシンポジウムが行われました。定員200名の会場がほぼ満席になり、遠方からもたくさんの方が足を運んでくださり、会場は終始熱気に包まれていました。



講演の様子

外国語としての第2言語習得と脳科学

小泉 英明

グローバル化に伴って、第2言語に関する問題は地球規模の社会問題になりつつあります。他国の方とのコミュニケーション手段としての第2言語が求められていますが、日本ではどうなっているのか。脳科学から見た効率的な学習方法があるのか。報告の中で日本の英語教育の問題点や英語学習に必須のやる気 (パッション) が日本の学習者に欠けていることを指摘しました。

幼稚園のカリキュラムにおける

“早期閱讀”*

朱 家雄

物語『さかなはさかな』に対する二種類の読み解きと演えきによって、欧米諸国とアジア諸国の幼児教育理論および実践の動向が具体的に述べられました。また中国における幼児の“早期閱讀”の現状と課題をふまえて、その意義と効果にも触れていました。

(※早期閱讀とは、幼児期に絵本や活字を読ませる読書活動を指します。)

上海市幼稚園教諭の 文化的状況についての調査

姜 勇

幼稚園教師の専門性を高めることは、幼児教育の質を高めることに直結します。その「教師の専門性」の中心は文化的素養であるという認識から、上海市の13地区で304名の教師に



対して行われたアンケートから、非常に興味深い結果が報告されました。

中国の幼稚園における“早期閱讀”のデザインと実施

張 明紅

幼稚園における“早期閱讀”の具体的な取り組み、課題について述べられました。中国の文化的特色を取り入れ、書き言葉や漢字を習得し、子どもの批判的な思考を培うことに有益な活動として取り組まれている内容でした。

シンポジウム：

「幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響～日・韓・中比較～」

(日本・お茶の水女子大学、韓国・梨花女子大学、中国・華東師範大学とベネッセ次世代育成研究所との共同研究)

オーガナイザー：榊原 洋一

シンポジスト：内田 伸子、李 基淑、周 念麗

お茶の水女子大(日本)、梨花女子大学(韓国)、華東師範大学(中国)とベネッセ次世代育成研究所の共同研究について、初めての公開となりました。

しつけスタイルと、リテラシー能力及び語彙能力に相関があることが大きな注目を浴びました。しつけスタイルは、日本と韓国は共通して「共有型」(ふれあいを重視し、子どもとの体験を享受・共有する)、「強制型」(大人中心のトップダウンのしつけや力によるしつけ)、「子負担型」(子育て負担感が大きく、育児不安か放任の二極化)に分類できます。一方、中国では「共有調和」(親子間で感情の共有ができ、協和的

な関係)、「共有厳格」(子どもと感情の共有ができる一方、子どもに厳しくしつける)、「疎遠無視」の三種類に分類でき、一人っ子のわが子に対する親の期待、子育て観の違いが現れる結果となりました。



第5回 活動報告

情動の子ども学

◆2009年11月2日、3日

◆上海華東師範大学<中国・上海>



登壇者 ※名前は登壇順、肩書は当時のもの

小林 登 (CRN 所長、東京大学名誉教授)

朱 家雄 (華東師範大学教授)

渡辺 富夫 (岡山県立大学教授)

周 念麗 (華東師範大学副教授)

山本 登志哉 (早稲田大学教授)

沈 月華 (中国福利会国際和平婦幼保健院主任医師)

華 愛華 (華東師範大学副教授)

谷村 雅子 (国立成育医療センター研究部長)

11月2日(月)、3日(火)に、チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)、華東師範大学共催で第5回東アジア子ども学交流プログラムを開催しました。「情動の子ども学」というテーマで、2日間にわたって日本と中国の専門家による最新の研究調査について8つの講演がありました。日本グッド・トイ展示会も同時開催し、日本でグッド・トイに選ばれた数多くのおもちゃを紹介し、実際に触れることのできるコーナーを大学の中に設置しました。当日は定員200名の会場がほぼ満席になり、また活発な質疑応答が行われ、会場は終始熱気に包まれていました。

1日目の講演の様子

**なぜ人間は心をもったのだろうか、
脳の三位一体学説から情動の役割を考える**

小林 登

人類進化学・脳の三位一体学説の視点から、人間はなぜ心をもったかが述べられました。理性の脳の基礎となる本能・情動脳がいかに大切かを説き、子どもに本能・情動脳にポジティブ

な感情(喜び)いっぱい生活をさせることで理性の脳も活発になると強調しました。

**中国における幼児メンタルヘルス教育の
実践と研究**

朱 家雄

上海の幼稚園で行われているメンタルケア教育プログラムの紹介と報告です。このプログラムの実施調査により、子どものコミュニケーションスキル、問題解決能力などが高められることが明らかになりました。

**人を引き込む
身体的コミュニケーション技術**

渡辺 富夫

赤ちゃんは言葉が分からないが、リズムには反応することを発見したのは20数年前のこと。その原理を利用して、人間とコミュニケーションがとれるロボットを開発研究し続けた渡辺氏の講演でした。本講演では、心が通う身体的コミュニケーションシステムE-COSMICの紹介と説明があり、その技術を採用して開発された「ペコッぱ」(会話に反応してうなづく葉っぱ)を実演しながら講演が進み、観客を魅了しました。

**所有に関する行動の日中文化比較：
子どもはいつ「中国人」になるのか？**

山本 登志哉

日中の大学生が中国映画『あの子を探して』を見て議論した際の意見の相違や、中国人とのコミュニケーションの具体的な事例が紹介され、日中の所有に対する考え方・倫理感情の違いが



明らかになりました。山本氏の研究によると、所有に関する違いは2歳の時から見られるそうです。

ベビーマッサージと アタッチメントについての研究

沈 月華

乳幼児のボディーマッサージとアタッチメントの関係についての調査報告があり、感情調節能力との関係性が示されました。

親の期待と幼児の発達について

— 中国 11 都市 3000 名の幼児の調査報告

周 念麗

中国全土 11 都市の 1～6 歳の子どもをもつ親に対する大規模な調査の結果が紹介されました。かつて学力重視一辺倒だった親たちの意識は、「セルフコントロール」、「ソーシャルスキル」、「リーダーシップ」、「認知能力」、「自立能力」にそそがれています。地域の差も興味深いものでした。

2 日目の講演の様子

教育的視野の中の子どもの遊戯

華 愛華

近年の中国における教育改革では、幼稚園の教育の中に「遊び」を取り入れるべく、「遊び」の教育的意義が強調されるようになりました。華氏は「教育のための遊び」の重要性を指摘し、本来の遊びの意義を問いかけてきました。

赤ちゃんはヒトに興味をもつ

— 赤ちゃんの対テレビ行動の解析より

谷村 雅子

1987 年に 3～24 カ月児を対象に行った集団調査では、赤ちゃんのテレビに対する詳細な研究がなされ、その報告となりました。会場から多くの質問が寄せられ、乳幼児に対するメディアの影響について中国でも大きな関心があることが分かりました。



第6回 活動報告

幼小連携

— 教育の公平性と質の関係の視点から —

◆2010年11月23日、24日

◆中華女子学院〈中国・北京〉



登壇者 ※名前は登壇順、肩書は当時のもの

小林 登 (CRN 所長、東京大学名誉教授)

朱 家雄 (華東師範大学教授)

榊原 洋一 (お茶の水女子大学教授)

馮 曉霞 (北京師範大学教授)

秋田 喜代美 (東京大学教授)

鄒 平 (北京市大地実験幼稚園園長)

張 燕 (北京師範大学教授)

王 練 (中華女子学院副教授)

周 念麗 (華東師範大学副教授)

万 鈞 (北京師範大学教授)

2010年11月23日(火)、24日(水)に、チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)、中華女子学院共催で第6回東アジア子ども学交流プログラムを開催しました。「幼小連携—教育の公平性と質の関係の視点から—」というテーマで、2日間にわたって日本と中国の専門家による最新の研究調査について7つの講演と、2つのワークショップがありました。2日目の午後には、子育て公開シンポジウムを行いました。

両日で延べ1500人ほどの方々が参加し、活発な意見交流が行われ会場は終始熱気に包まれました。

1日目の講演の様子

子どもは2つの情報によって育っている— 遺伝と文化

小林 登

子どもは「遺伝」と「文化」という2つの情報によって育ちます。遺伝的な情報は進化の道をたどり、長い期間を経て変化してきましたが、

文化的な情報は進化と比べて短い時間で変わるものであると述べました。子どもの未来の教育を考える際に、この2つの情報の在り方、メカニズムを考えて教育をデザインすることの重要性に触れました。

幼小接続についての考察

朱 家雄

中国における幼小接続の歴史、現状と課題についての考察がありました。1990～1994年にUNICEFと中国教育部の共同で行われた幼小接続の研究は幼稚園、小学校のカリキュラム改革に影響を及ぼしました。それから20年を経て、現在の中国でもっとも解決すべき問題は何か。朱氏は、「教育の公平性」と「教育資源の均等化」であると主張しました。

小1プロブレムと発達障害

榊原 洋一

近年日本の教育界で問題となっている「小1プロブレム」を生じさせる原因は何であるのか、昔と今では何が異なるのか、「小1プロブレム」「気になる子どもたち」「発達障害」の3つのキーワードの関係についての考察がありました。

義務教育の機会均等と入学準備

馮 曉霞

現在の中国では義務教育の公平性に注目が集まっていますが、就学前教育の機会が不平等であれば、義務教育の入学準備に格差が生まれ、ひいては就学後の学習状況にも影響を及ぼすという発表でした。就学前教育段階においても施策を打つ必要性があることを強調しました。

幼児期から児童期への教育

— 子ども・保護者・教師の経験から考える幼小文化間移行 —

秋田 喜代美

幼小文化間移行をどのように経験しているのか、子ども・保護者・教師を対象に行った調査



の報告がありました。時代背景にともなって幼小連携の見解や視点が異なる点や、現在の課題に触れた上で、日本での国・自治体・園における取り組み事例について紹介がありました。

ワークショップ1

幼小の資源共有・双方向連携で、小学校入学への適応力を高める

鄒 平

北京市大地実験幼稚園園長の鄒氏を中心に、園の「幼小接続・教育一体化」モデルの研究と「幼小接続カリキュラム」の開発についての紹介がありました。

2日目の講演の様子

都市は、流動児童に基本的な就学前教育を提供できるのか？

— 平民教育は教育の公平性を実現するための選択肢である —

張 燕

出稼ぎ労働者の都市部への移動にともなって、流動児童の就学前教育の需要が増加していますが、行政側の受け皿が依然完備されていない状況で、民間の無認可幼稚園が台頭している現状があります。しかし、流動児童の就学前教育を保障するには、「第三の道」(非営利の民間団体NPO)が必要であり、保護者、子ども、教師が三位一体で行う平民教育が、流動児童の就学前教育を保障し、教育の公平性を促進する1つの鍵になるのではないかと述べました。

流動児童の親の子どもに対する期待と教育の現状調査

— 北京のある村を例に —

王 練

北京市皮村の児童の親を対象に「流動児童の教育状況」と「流動児童の親から子どもの教育に対する期待」について、調査結果の発表があ

りました。子どもと保護者の状況を明らかにし、流動児童に質の高い就学前教育を提供することで、教育の公平性という目標の実現をはかることが重要であると述べました。また家庭教育環境改善のため、親への支援活動も必要との提案がありました。

ワークショップ2

就学前教育の公平性についての考察

— 湖南省 37～48ヶ月の幼児 1,000名を対象にした発達調査 —

周 念麗

湖南省の都市部と農村部で37～48ヶ月児とその親たちを対象に行った発達調査の結果についての報告でした。都市部と農村部では言語・認知・運動などの能力の側面において有意な差がみられ、家庭の経済力・学歴などの影響を受けていることが分かりました。貧困地域へ目を向け、さまざまな支援活動を行うべきであるという点が強調されました。それに補足するような形で、中華女子学院の鄒敏氏と華東師範大学の石麗娜氏はそれぞれ、「流動児童の現状調査報告」、「障害児の統合教育」をテーマに発表しました。さまざまな角度から、教育の公平性についての考察がなされたワークショップとなりました。

子育て公開シンポジウム

公開シンポジウムでは、現地の子育て中の親や現場の幼稚園教師向けに、中国の万鈞氏による食育の講演、朱家雄氏による早期教育に関する講演がありました。その後、日本の榊原洋一氏を加えて会場からの質問に答える形で質疑応答を進行しました。保護者の方からは早期教育、学力のほか、子どもの風邪やアレルギーなどの健康面に関する相談・質問が多く寄せられ、時間が足りないほど白熱しました。

第7回 活動報告

質のよい幼児教育とは

— Child-Caring Design (CCD) の視点から —

◆2011年10月21日、22日

◆鄭州幼児師範学校〈中国・鄭州〉



登壇者 ※名前は登壇順、肩書は当時のもの

小林 登 (CRN 所長、東京大学名誉教授)

朱 家雄 (華東師範大学教授)

榊原 洋一 (CRN 副所長、お茶の水女子大学教授)

劉 郷英 (福山市立大学准教授)

多田 千尋 (芸術教育研究所所長)

張 六齡 (鄭州幼児師範学校付属幼稚園園長)

蕭 芳華 (台湾亜細亜大学副教授)

2011年10月21日、22日の2日間にわたり、各国の研究者で「質のよい幼児教育とは」について、7つの講演がありました。会場からの質疑応答の時間も設け、鄭州幼稚園の先生を中心とした幼児教育最前線の方々とは各国の研究者間で、深い交流がありました。

1日目の講演の様子

Child-Caring Design (CCD)

小林 登

「Child-Caring Design (CCD) とは、子どものことをよく考え気づかって、子どもに関係するモノやコトを子どもの立場からデザインすること」と小林登所長は提唱しています。子育て、保育、幼児教育には、CCDの考えが必要です。脳の進化論から見ても、子どもたちに喜びいっぱい体験をさせることは、子どもの心身発達にとって重要です。また、子どもの問題を解決するには、子どもに関係する色々な立場の研究者、実践家と一緒に話し合うことが必要です。それこそが「子ども学」が担うべき役割であると述べました。

私から見た中日幼児教育の相違点と共通点

朱 家雄

日本も中国も同じく子どもの主体性や自由遊びを重視し、同じく習いごとにも熱心です。ただ、違うところもあり、例えば、日本では、中国より礼儀を重んじる、子どものいさかには、先生の介入が少ない、薄着で冬でも短パン姿、縦割り保育、防災訓練などを重視しています。一方、中国では、技能訓練、言語教育(バイリンガル教育)、規則正しい生活などを重んずる傾向があります。

その背景には、日中文化の違いや親の育児意識、子どもへの期待、西洋思想の影響などがあると朱氏は主張しました。

良い保育の質とはなんだろうか

榊原 洋一

「保育の質を高める」というスローガンを人々は耳にタコができるほど聞いているでしょう。では、よい保育の質とはなんでしょう？榊原氏はまず保育の質についての考え方を整理したうえで、アメリカ NICHHD が行ったコホート調査の結果や、ご自身で行ったアジア4カ国(日本、中国、ベトナム、タイ)のQOL調査の結果を踏まえて、その問題について問い直しました。





2日目の講演の様子

質のよい教育を考える

— 日本の幼児教育の現状と課題

劉 郷英

日本の保育制度と実践の歴史から出発し、現代日本の幼児教育、保育士・幼稚園教諭養成の現状と今後の課題について述べました。

劉氏は日本で子育てを経験し、現在は保育士・幼稚園教諭養成校の准教授を務めています。日本での育児体験、大学での教授経験をもとに、中国人研究者の視点で日本の幼保制度について述べました。中国の幼稚園の先生方にとって日本の幼保制度についての理解が深まる内容でした。

幼児教育と子どもの発達における 「おもちゃ」の役割

多田千尋

おもちゃは子どもの心身発達にとって、不可欠な栄養素であると多田氏は常々主張しています。子どもの発達に応じて、適切なおもちゃを選んで提供すること、遊びを重視していくことが大切です。おもちゃの実演を交えての講演がとて参加者の興味を引いたようです。また、東京おもちゃ美術館や震災地で実際に遊んでいる子どもたちの姿が映像で紹介された説得力のある内容となりました。

すべての子どもが平等に教育を受け、 幸せな生活を送るために

張 六齡

「児童権利条約」では、子どもの権利が保障されています。子どもは平等に教育を受け、幼稚園では、子どもの権利を保障するために、さまざまな努力をしなければいけません。張氏は

中国鄭州市のいくつかの幼稚園で行ったユニークな活動について紹介しました。

教育活動のデザインと幼児動作の発達

蕭 芳華

教育活動のデザインは子どもの体の発達にも十分考慮して行う必要があるという視点から研究をしています。正しくペンを持ち、正しく美しく文字を書くことを例に、子どもの動作筋肉の発達を細かく分析し、教育活動のデザインに生かすべき工夫を紹介しました。

今回の活動には河南省を中心とした幼稚園の園長先生が多数参加しました。中国政府から幼児教育を重視する方針が出されたこともあり、参加者の意識は大変高いものでした。各国の学者の対話によって、日本と中国の相似点と相違点が浮き彫りにされ、相手のいいところを知ることで、自分たちの課題に直面し、解決のヒントにもなると参加者からの嬉しい声が寄せられました。

これからも引き続き CRN はこの活動を続けていきます。日本、中国、そして、東アジアの国々と地域に、「子ども学」を紹介することによって、子どもへの関心が高まり、子どもに関する問題の解決に糸口を提供していくことを願っています。



第8回 活動報告

遊びと学びの子ども学

◆2012年9月22日、23日
◆国立台北教育大学<台北>



登壇者 ※名前は登壇順、肩書は当時のもの

小林 登 (CRN 所長、東京大学名誉教授)

朱 家雄 (華東師範大学名誉教授)

榊原 洋一 (CRN 副所長、お茶の水女子大学教授)

郭 煌宗 (中国医薬大学付属医院主任医師)

翁 麗芳 (国立台北教育大学教授)

多田 千尋 (芸術教育研究所所長)

張 世宗 (国立台北教育大学教授)

范 丙林 (国立台北教育大学教授)

第8回東アジア子ども学交流プログラムのテーマは「遊びと学びの子ども学」です。2日間にわたって、医学、発達心理学、教育学、工学、建築学などの視点から、子どもの発達と遊び、遊びの中のおもちゃの役割などについて、多角的に検討しました。また、保護者向けの公開シンポジウムも実施され、日々の育児の中で直面する問題についても会場から質問が挙がり、研究者、子育て中の保護者らが熱心に参加されました。

1日目の講演の様子

子ども問題を予防し、解決するには —「子ども学」のすすめ

小林 登

子どもの問題を解決するには、学際的で包括的な科学、すなわち「子ども学」(Child Science)が必要であると述べました。子どもに「遊びの喜びいっぱい」を体験させることが子どもの心身発達にとって大切であるという理念は、台湾のメディアからも大きな注目を集めました。

子どもは遊ぶのか、 それとも遊ばされるのか

朱 家雄

幼児教育の現場で「遊び」をいかに教育の中に取り入れるのかというアジア共通の課題を、独特な視点で深く考察しました。

テーマ講演1:

医学から見た子どもの遊びと発達

このセッションでは日本と台湾から2人の医師が登壇しました。日本からはお茶の水女子大学の教授である榊原洋一 CRN 副所長が「子どもの発達における遊びとおもちゃの意味」、台湾からは中国医薬大学付属医院主任医師の郭煌宗先生が「医学的観点から見た就学前の親子の『遊び』と児童発達」と題して、実験の結果や臨床での実践事例などを交えたお話をされ、続いて活発な議論が展開されました。

幼児教育現場ではどう教えるか?どう遊ぶか? —台湾と日本の幼児教育観を比較する

翁 麗芳

台湾と日本の幼児教育の違いは育児観の違いによるものではないか、という分析を、比較研究に基づき、また台日の実践現場の様子をうつしたDVDを見せながら話されました。いきいきとした子どもたちの様子が伝わる発表でした。





2日目の講演の様子

テーマ講演 2:

おもちゃと子どもの発達

東京の芸術教育研究所所長の多田千尋先生は「子どものおもちゃと遊び」と題し、ワークショップ形式でおもちゃの実演をしながら発表し、会場を大いに沸かせました。続いて国立台北教育大学の張世宗先生が「玩具から『学具』へ、教育（エデュケーション）から『楽育』（エデュテイメント）へー子どもの『遊び』の研究と応用*」をテーマに、少子高齢化の社会では、「リハビリより日々の予防が大事」という視点から、「遊び」、「おもちゃ」が大きな社会的意義をもつと力説されました。

*「学具」「楽育」はいずれも講演者の造語。「学具」は教育効果と遊びの自由さを兼ね備えた物やメディアのこと。

教育における

マルチモーダルなコンピュータを用いた インタラクティブな学習デザイン

范 丙林

デジタル時代の技術をどのように幼児教育の中に取り入れ応用していくかについて、大きなヒントを与えてくれる講演内容でした。



子育て公開シンポジウム

同日午後、保護者向けの公開シンポジウムが行われました。各日ご講演いただいた先生方が一堂に登壇し、それぞれが講演の内容をまとめた話題提供をし、会場から質問を受けました。

子育て中の保護者の方々が100名近く来てくださいました。「子どものしつけの問題」、「子どものために、いつ、どのようなおもちゃを選ぶのか」、「iPadやコンピューターゲームと伝統のおもちゃでは、どちらが子どもにとっていいのか」など、デジタル時代ならではの悩みが若い保護者たちの声からうかがえました。

2日間という短い時間ではありましたが、日本、中国大陸、台湾の専門家、現場の保育士・教師や学生、保護者との交流ができた貴重な経験となりました。同じ東アジアの隣国でありながら、同じような社会問題を抱えると同時に、異なる問題も抱えていることに気付かされました。

お互い刺激し合い、双方の問題の可視化と解決への糸口を専門家、現場の先生、保護者の議論から見つけていくことがこのプログラムが担う重要な役割であると改めて強く思いました。



第9回 活動の報告

Playful Pedagogy ～遊びと学びの子ども学～

— 第2回 ECEC 研究会 —

◆2013年10月26日、27日

◆慶應義塾大学三田キャンパス



登壇者 ※名前は登壇順、肩書は当時のもの

小林 登 (CRN 名誉所長、東京大学名誉教授)

榊原 洋一 (CRN 所長、お茶の水女子大学大学院教授)

秋田 喜代美 (東京大学大学院教授)

朱 家雄 (華東師範大学名誉教授)

張 世宗 (国立台北教育大学教授)

周 念麗 (華東師範大学副教授)

翁 麗芳 (国立台北教育大学教授)

入江 礼子 (共立女子大学教授)

上田 信行 (同志社女子大学教授)

2013年10月26日、27日の2日間にわたり、Playful Pedagogy (楽しく遊びながらの教育)、Guided play (ガイドされた遊び) といった保育・幼児教育の概念を中心に、遊びと学びについての議論が日本、中国、台湾の研究者9人によって行われました。

1日目の講演の様子

喜びいっぱい生命感動学

小林 登

小林氏は脳科学に基づく実証事例を通して、喜びという感情が子どもの成長にいかにか切かを解説。子どもの心が喜びで満たされるには、保護者や保育者が子どもに優しく、思いやりをもって接することが欠かせないと語りました。

Playful Pedagogy の目指すものは?

榊原洋一

榊原氏は Playful Pedagogy を「楽しく遊びながらの教育」と定義し、これを実現するための重要な方法の1つとして、Guided play (ガ

イドされた遊び) を挙げました。幼児教育の方法を Direct instruction (直接指示) と Free play (自由遊び) に二分した時、両者の中間に位置づけられる教育法で、子どもの主体性を尊重する一方、子どもの好奇心や探究心を刺激できるように目標や環境を設定するなど、保育者のかかわりも重視すると、その特徴を説明。アメリカの幼児教育研究や発達心理学研究の成果なども紹介し、子どもの発達に対する Guided play の有効性を強調しました。さらに、日本の保育が伝統的に行っている、遊びを通して子どもを育てることの良さが世界的に認められつつあると語り、自信を持って子どもと向き合ってもらいたいと、会場の保育者にメッセージを送りました。

子どもの遊びをはぐくむ保育者： 育ちを見通した学びの多様性

秋田喜代美

秋田氏は、幼児教育での遊びの重要性を力説。Guided play における保育者の役割を、「子どもが経験している遊びの中から、その子どもにとって何が学びの対象となるかを見取ること」と位置づけ、子ども1人ひとりの状況に応じてかかわり方や教育目標を変えるなどの多様な対応が求められると語りました。





教えと学びの難しさ

—幼児に対する誘導的な遊びの理解

朱家雄

遊びと学びとをいかに調和させるか。これが、朱氏の最も強調したポイントです。積み木などを用いた Guided play の具体例を通して、子どもが自由に遊ぶよりも、保育者が子どもと一緒に遊び、指導した方が子どもの達成感や気づきが大きくなることを紹介しました。

学習の場における遊びの教育： 子どもに喜ばれる学具と環境設計

張世宗

教育とエンターテインメントを融合した学びの形「Edu-tainment」（楽育）。これをどのように実現するかを、提唱者である張氏が解説しました。展示物に触れられる博物館などが具体例として挙げられ、また、その楽しさを来場者に実感してもらおうと、折り紙で動く鳥を折るなどのミニワークショップも開催されました。

2日目の講演の様子

シンポジウムⅠ：

東アジアの現場から

中国、台湾、日本での幼児教育の現状と課題について、各国の研究者が報告。中国の周氏、台湾の翁氏は、子どもの社会性や自主性の発達を促す教育法として Guided play に期待を寄せ、これを普及させることの重要性を訴えました。日本の入江氏は保育者の理想と実際の保育との間のギャップを指摘し、保育者志望の学生に対する実習、保育者になってからの現職教育・

研修などを充実させる必要性を強調しました。

Playful Learning の情景

上田信行

「本気でものごとにかかわる時に感じるワクワクドキドキこそ学びの原体験であり、子どもの心身の成長に欠かせない」。上田氏はこのように訴え、自身が提唱する Playful Learning について解説。協働的なものづくりや対話を通して身につく学び、特定の対象に向けた情熱によって深められる学びというように、Playful な学びの形を例示しました。

シンポジウムⅡ：

プログラムの最後に、榊原氏の司会による、張氏、上田氏、朱氏、周氏、入江氏の5名の総合討論、さらに来場者との質疑応答が行われました。Guided play をいかに充実させるかが最も大きな論点となり、活発な意見交換がなされました。「保育者が子どもに寄り添った対応をするためには、日々子どもと熱心に向き合い、1人ひとりをしっかり見取ることが何よりも大切である」という朱氏の見解は、国境も、研究者と保育者という立場も超え、登壇者と来場者の賛同を得ました。

医学者、発達心理学者、デザインの専門家などが一堂に会し、それぞれの立場から遊びと学びについて議論を重ねた2日間でした。CRNでは今後も子どもの成長を支援するためのプログラムを行っていききたいと考えています。

CRNのあゆみ

- 1996 ・日本語・英語サイトオープン
・シンポジウム「マルチメディア社会の子どもたち」
- 1997 ・シンポジウム「中高生のデジタルな友達づくり」
・ジェーン・グドール博士講演会 「チンパンジーの世界と自然のお話」
・ジェイ・ベルスキー博士講演会 「子どもの発達と家族研究」
- 1998 ・国際シンポジウム 「メディアは子どもをどう育てるのか？」
・ジェーン・グドール博士講演会「チンパンジーと自然のお話」
・CRN ウェブサイト「WEB デザインアワード」銀賞受賞
- 1999 ・公開座談会 「学級崩壊はしついでくいとめられるのか？」
・プレイショップ「PLAYFUL」
- 2000 ・公開座談会「『学校』と『家庭』を結ぶもの」
・『チャイルド・リサーチ・ネット』発刊
・プレイショップ「Feel the Media」
・国際シンポジウム「21世紀の子育てを考える」
・『子育てのスタイルは発達にどう影響するのか』発刊
- 2001 ・プレイショップ「ふゆものがたり～プレイフルストーリーをつくろう」など多数
・『CRN YEAR BOOK 2001』発刊
・研究拠点「ながやまチーきち」開設（～2002年）
・『新しい学びと遊びの実験研究「ながやまチーきち」』発刊
・音のワークショップ（～2003年）
- 2002 ・CRN 実践保育研修会「保育の質を考えるー心とからだを育む視点から」
・『CRN YEAR BOOK 2002』発刊
・プレイショップ「カラフル王国であそぼう」など多数
・「子ども学研究会」発足（～2003年）
・メディアワークショップ（主催：CRN 子どもとメディア研究室）
・チーきち放送局をつくろう
- 2003 ・『CRN YEAR BOOK 2003』発刊
・『子ども学研究会 Report 2003』発刊
・「日本子ども学会」設立
・「こがねいメディアキッズ」（～2004年）
- 2004 ・『CRN YEAR BOOK 2004』発刊
・「第1回子ども学会議」（「日本子ども学会」学術集会）
・チャイルド・サイエンス懸賞エッセイスタート
・中国の子ども研究機関を訪問（中国 北京）
- 2005 ・中国語サイトオープン
・『CRN YEAR BOOK 2005』発刊
・「第2回子ども学会議」（「日本子ども学会」学術集会）
・英語ウェブサイトリニューアルオープン
・中国宋慶齡基金会の招聘を受け小林所長が講演（中国 上海）

- 2006
- ・『CRN YEAR BOOK 2006』 発刊
 - ・子どもの健康に関する学会にて「食育」をテーマに分科会を開催〔中国 長春〕
 - ・「第3回子ども学会議」（「日本子ども学会」 学術集会）
 - ・中国政府主催のシンポジウムにて小林所長が講演〔中国 上海〕
- 2007
- ・『CRN 設立 10 周年記念号』 発刊
 - ・CRN 設立 10 周年記念国際シンポジウム 『『子ども学』からみた少子化社会』
 - ・「第4回子ども学会議」（「日本子ども学会」 学術集会）
 - ・第1回 東アジア子ども学交流プログラム開幕式〔中国 上海〕
 - ・第1回 東アジア子ども学交流プログラム・幼児教育展覧会開催〔中国 長沙〕
- 2008
- ・日本語サイトリニューアルオープン
 - ・第2回 東アジア子ども学交流プログラム開催〔日本 東京〕
 - ・『CRN ニュースレター vol.1』 創刊 *日中英3言語対応
 - ・「第5回子ども学会議」（「日本子ども学会」 学術集会）
 - ・第3回 東アジア子ども学交流プログラム・グッド・Toy展示会開催〔中国 杭州〕
- 2009
- ・『CRN ニュースレター vol.2』 発刊 *日中英3言語対応
 - ・『東アジア子ども学交流活動報告書 vol.1』 発刊 *日中英3言語対応
 - ・第4回 東アジア子ども学交流プログラム開催〔日本 東京〕
 - ・第5回 東アジア子ども学交流プログラム・グッド・Toy展示会開催〔中国 上海〕
 - ・「第6回子ども学会議」（「日本子ども学会」 学術集会）
- 2010
- ・『CRN ニュースレター vol.3』 発刊 *日中英韓4言語対応
 - ・『東アジア子ども学交流活動報告書 vol.2』 発刊 *日中英3言語対応
 - ・小林登所長が韓国晋州教育大学にて招聘講演
 - ・環太平洋乳幼児教育研究学会 PECERA 主催の第11回学術集会に出席、小林登所長講演
 - ・日本語サイトリニューアルオープン
 - ・「第7回子ども学会議」（「日本子ども学会」 学術集会）
 - ・『CRN ニュースレター vol.4』 発刊 *日本語対応
 - ・第6回 東アジア子ども学交流プログラム・グッド・Toy展示会開催〔中国 北京〕
- 2011
- ・『CRN ニュースレター vol.5』 発刊 *日中英3言語対応
 - ・『東アジア子ども学交流活動報告書 vol.3』 発刊 *日中英3言語対応
 - ・『CRN ニュースレター vol.6』 発刊 *日中英3言語対応
 - ・「第8回子ども学会議」（「日本子ども学会」 学術集会）
 - ・第7回 東アジア子ども学交流プログラム・グッド・Toy展示会開催〔中国 鄭州〕
- 2012
- ・『東アジア子ども学交流活動報告書 vol.4』 発刊 *日中英3言語対応
 - ・「第9回子ども学会議」（「日本子ども学会」 学術集会）協力
 - ・第8回東アジア子ども学交流プログラム開催（台北）
- 2013
- ・榎原洋一先生が所長に就任、前所長小林登は名誉所長に
 - ・ECEC（Early Childhood Education and Care）の研究をスタート（研究会3回開催、ニュースレター3号発刊）
 - ・第9回東アジア子ども学交流プログラム開催（日本・東京）
 - ・「第10回子ども学会議」（「日本子ども学会」10周年学術集会と国際シンポジウム共催）
 - ・世界おもちゃサミット（グッド・Toy委員会、子ども学会と共催）



日本グッド・トイ展示会

子どもたちの健やかな発達成長には、栄養が不可欠です。その栄養は「食事」からだけでなく、「遊び」からも得られます。子どもは遊びを通じて、心や体の能力を高め、広い世界へと想像の翼を羽ばたかせ、自分自身についても知ることになります。「遊び」によって、個性が生まれ、自主性や忍耐力が自然と身に付き、いろいろなことを学んでいきます。そして、子どもにとって大切な「遊び」に欠かせないものが、おもちゃです。

私たち大人は、おもちゃを感性や想像力、好奇心の育成を手助けしてくれる大切な道具と考え、子どもの成長に合わせて、五感でさまざまな刺激をキャッチし、もてる可能性を引き出してくれるものを選んであげることが必要です。

この展示会では、東京おもちゃ美術館館長、日本グッド・トイ委員会理事長の多田千尋氏の監修のもと、日本で流通するおもちゃの中で、優秀なおもちゃに贈られる「グッド・トイ賞」受賞作品の中から、心や身体の成長に必要な「イマジネーション力」、「自然や科学への好奇心」、「音楽アートな感性」、「運動能力」、「コミュニケーション力」の栄養素を育むことができるものを50数点厳選し、紹介しています。

CRNは、東アジア子ども学交流プログラム会議と合わせて、長沙、杭州、上海、北京、鄭州にて、この展示会を開催してまいりました。大学の学生や教師を対象に、質のよい玩具、子どもの成長発達によい玩具を展示し、皆様が熱心に研究している姿が印象的でした。

会議の前後やお昼休みなど、会議の合間を利用して、会議に参加した学生、現場の教師、大学教授、幼児をもつ親が、おもちゃ展示スペースに集まって、パネルの説明を読みながら、実際におもちゃに触って、遊び方を研究する熱心な姿が目には焼きついています。会場アンケート結果からも見て取れるように、もっとも印象に残った内容のひとつは「おもちゃ展示会」とありました。参加された方々は、展示されているおもちゃのデザイン、発想に感動し、子どもに創造性、芸術性を育むことができることに大変興味をもっていました。

日本グッド・トイ展示会は2日間と短い期間で開催していますが、日中の研究者が大学の学生と、「子どもとおもちゃ」、「子どもの遊びと学び」について考えるひとつの機会となっています。



発刊物のご紹介

東アジア子ども学交流プログラム報告書 (バックナンバー)

このプログラムの詳細の発表内容を掲載していますので、ぜひご覧ください。ウェブサイトからPDFでダウンロードできます。

<http://www.blog.crn.or.jp/about/publication.html#2>



2008 vol. 1



2009 vol. 2



2010 vol. 3



2012 vol. 4



東アジア 子ども学 交流プログラム

発行日 ● 2014年3月31日

発行 ● チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)
〒206-8686 東京都多摩市落合 1-34
(株) ベネッセコーポレーション内

編集人 ● 榎原洋一

編集スタッフ ● 劉愛萍、小川淳子、岡田恵、桜井玲子、内田幸枝

編集協力 ● (株) ペンダコプロダクション

デザイン ● 中村ヒロユキ (Charlie's HOUSE)

memo

A series of horizontal dotted lines for writing.



子ども学研究所

CRN

チャイルド・リサーチ・ネット

日本語版

<http://www.crn.or.jp/>

英語版

<http://www.childresearch.net/>

中国語版

<http://www.crn.net.cn/>

チャイルド・リサーチ・ネットは株式会社ベネッセコーポレーションの
支援のもと運営されています。